助成番号：168

第18回国際鳥学会に出席して

藤　巻　裕　蔵
畜産環境学科野生動物管理学研究室

1. 目　　的

第18回国際鳥学会出席を目的とした。

2. 期　　間

1982年8月16日～25日

3. 場　　所

ソ連邦，モスクワ大学。

4. 内　　容

国際鳥学会は4年に1回，各国もちまわりで開催されている。今回の第18回はソ連で行われた。会場はモスクワ郊外のレーニン丘にあるモスクワ大学である。正式にはミハイール・ロモノーソフ記念国立モスクワ大学で，レーニン丘にあるのは1949～1953年に建てられた新館である。構内には40の建物のほかに植物園や競技場などもある。主会場となった本館は，32階建てで，中央にある尖塔の先端の高さが380mもあるという大きな建物である。

出席者は約1,400名で，このうち900名近くはソ連の研究者であった。国外では35カ国から約500名で，日本からは私もふくめ7名が参加した。

第1，2日目は受付と開会式だけで，開会式は1,500名くらいが入る大ホールで行なわれた。3日目から研究発表が始まった。発表は，毎日9時から1時間が全体講演，次に午前と午後に2時間のシンポジュウムが行なわれた。一般の研究発表は全てポスター展示で行なわれ，毎日昼食後1時間がその説明にあてられた。さらに夕食後には（RTD）小集会が行われた。

発表されるテーマは，古生物・進化から形態，生態にいたるまで，鳥学のあらゆる分野にわたった。全体講演は毎日1編づつで，鳥の渡り，ＤＮＡの比較によるスズメ目の分類など大きなテーマで行なわれた。シンポジュウムは，生理学，感覚器など基礎的なものから鳥類の保護，狩猟といった応用的なものまで多岐にわたり，47のテーマがあった。シンポジュウムといっても，1テーマについて2時間に3～7名が発表するので，時間不足となりがちで，2，3の質問があるくらいで，活発な討論が行われるというようなことがなかった。シンポジュウムは同時に3～5会場で行われたので，

全てを聞くことはできなかった。私が出席したシンポジュウムの中で興味あるテーマとしては，鳥類の保護，ツル，鳥の渡り，人工環境への鳥類の適応，生息場所の消失などがあった。これらの発表からうかがえることは，世界的に鳥の生息場所が減少しており，その傾向はツルのような大型の水辺の鳥類で著しいことである。これらの鳥類やその生息場所の保護・保全が大きな問題となっていることをつよく感じた。

シンポジュウムでは討論らしい討論が行われなかったが，そのかわり夕食後のRTDは小集会といった感じで，シンポジュウムのテーマをさらに細切したようなテーマで，20〜30名が活発に討論をしていた。RTDに本当の学会らしさがあるように思われた。

一般の発表はポスター展示で行われ，発表題数は約250，私はこの部門で「都市における植被と鳥類の関係」について発表した。展示は，タイプ用紙8枚に調査方法や結果をまとめたものである。都市の鳥相，とくに都市の種々の環境と鳥の生息状況との関係については，わが国ではあまり調べられないが，ヨーロッパではこのような研究は各地で行われており，RTDにもこのテーマのものがあった。今回のポスター展示には時間制限がなかったので，会期中，毎日1時間づつ自分のポスターの前に立っていなければならなかったが，同じようなテーマで研究している研究者と意見交換が充分できたので，得るところが大きかった。

以上のような発表の他に，鳥の写真の展示，映画の上映，鳥類関係の書籍の展示があった。映画には，稀少種の生態を記録したものなどすぐれたものが多かった。

今回の学会参加で，世界の鳥類研究の動向をおおまかではあるが，知ることができた。このほかもう一つの成果は，ソ連の極東地方の研究者といろいろ意見交換ができたことである。日本に生息する鳥類の多くは渡り鳥である。そのうち冬に日本に渡来する鳥類はソ連極東，シベリアで繁殖する。これらの鳥類，とくにハクチョウ，ガン，カモメ，ワシなどを研究対象としている研究者にとって，繁殖地における情報は不可欠のものである。しかし現状では情報は非常に少ない。1973年に日ソ間で結ばれた日ソ渡り条約でも渡り鳥の保護のための学術交流がうたわれているが，交流はほとんど行われていない。今回の学会の開催中にはわれわれ日本からの参加者は，各自関心のある問題について各国の研究者と情報の交換を行ったが，その一環として，日本とソ連極東の研究者11名が会合をもった。この会合では，各自が現在行っている研究テーマや関心のある問題について話し合い，今後の研究交流について意見を交換した。これまでにも，わずかではあるが両国の研究者の共同研究や，また相互に学術雑誌に論文を掲載するなど研究交流が行われている。このような実績にもとずき，参加者は今後とも鳥類保護のために各種の情報や文献の交換など研究交流を進めることの必要性を確認した。現在までに両国の研究者と研究分野，テーマのリスト，文献紹介を掲載したニュース・レターが2回発行され，すでに交流が始まっている。

以上のように，今回の国際学会の出席では大きくわけ，2つの成果が得られた。